焔の海兵さん奮戦記

むん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
焔の海兵さん奮戦記

【Ｎコード】
Ｎ４７７２Ｚ

【作者名】
むん

【あらすじ】
瞼を開くと、そこは青い海の世界だった。
普通に暮らしていた社会人男性がＯＮＥ　ＰＩＥＣＥの世界に憑依転生。
その憑依先は、なぜか鋼錬の焔の錬金術師ロイ・マスタング。
なんでどうしてこうなった？　突っ込みたいことは山ほどあるが、とにかく生きていこうと努力します。
ゆっくり更新していくつもりです。

プロローグ（前書き）

こちらはＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ×鋼の錬金術師の二次創作となります。
恥ずかしながら処女作です。
温かく見守っていただければ幸いです。

プロローグ

その日の俺は、仕事を終えて夜遅く駅のホームにいた。
年度末で気合いを入れて山積みになった仕事のために残業が続く日々の一コマだ。
使い過ぎた頭が少し熱っぽく、ふらふらとしている。ＰＣとにらめっこで酷使した目の奥がじわりと痛む。肩や背中の筋に石か何かが詰まったように重苦しい。
全身が溜まりに溜まった疲労を訴えている。
自分の身体を労ってやりたいが、後一週間くらいは休めない。せめて早く帰って飯食って寝よう。今は自分を騙し騙し働くしかない。
でも仕事が落ち着いたら、その時にガッツリと有給を取ろう。自宅でまったりしてもいいし、久しぶりに実家に帰ってみてもいい。
山、森、海、川と日本で揃う自然は揃っているわりに、不便というほど不便でない実家のある田舎町の風景が頭の中に浮かんでくる。
ああ、ひさしぶりにアウトドアがやりたい。大自然の中でのんびりと過ごしたくなってきた。
故郷に思いを馳せていると、ふいに冷えた夜風が吹き抜けていった。それが一緒に細かな塵でも運んできたのか、チクンと目に痛みが走る。
唐突な痛みに対して、俺は反射的に目を閉じた。

そして。
目に感じた痛みがようやく治まって瞼を開くと、青い空があった。
嘘みたいな本当の話。
一瞬前まで目の前にあった蛍光灯に照らされた駅のホームの風景が消え失せ、南国リゾートの写真もかくやと言わんばかりのコバルトブルーの海と、それよりはいくらか淡い空が視界いっぱいに広が

っていた。
気づけばツンと鼻の奥を突いていた冷気は温く濃い潮の匂いに取って変わり、煌々と白く灯っていた蛍光灯の明かりは燦々と鮮やかに輝く陽光になっている。

（なんだよ、これ。どうなってんだ！？）

今まで生きてきた中で培った常識を大きく逸脱した現象に立ち竦む。
どうにか状況を理解しようとしても、あまりの出来事過ぎて俺の脳ミソは情報を処理しきれなくなる。
やけにデカイ鼓動が耳に付きまとい始めた途端、その早い拍動に合せて重く鈍い痛みがオーバーヒートしてしまった頭の内側から響き出す。
今まで経験したことのない激痛に堪えきれずにその場で崩れ落ちてしまう。
身体がピクリとも動かない、声の一つも出ない。
このままじゃ、死ぬ、死んでしまう……！！

「ロイ君！？」

死を意識したところに耳へ滑り込む悲鳴のような少女の声と、こちらに近付く足音が何人か分。
痛みを堪えて何とか薄く開けた目だけで声と足音の方を向く。
そこには、見たこともない少年少女が3人。
高校生だろうか？　逆光で顔とかはよく見えないが、この大人とも子供とも言えない雰囲気はたぶんそうだろう。3人ともそろってライトブルーのラインが入った白ジャージを着ているところからして運動部部員とかかな。
とにかく人が来てよかった！

必死の思いで震える腕を動かして手近な少年のズボンの端を掴み、助けを求める声を喉の奥から絞り出す。

「たすけ…あたま、われる…っっ」

「頭が痛いのか！？」

問い質してくる声に、こくこくと頷く。

途端に3人の雰囲気がみるみる強張っていくような気がした。急に倒れて頭が痛いとなったら、ただ事ではないであろうことは誰にでも容易に想像がつくことだ。彼らも状況が極めて悪いと気づいたのだろう。

「動かさねえほうがいいだろ、これ」

「そうだな。ヒナ、教官を呼んできてくれ！」

「ええ、待っていて！！」

緊張の走った会話と、バタバタ駆けていく音が頭上を横切っていく。

これで助かるかもしれない、と思うと一気に張りつめていた緊張が解けた。

相変わらず頭痛は止まないし、本当に大丈夫かどうかも分からない。けれども、いったん抜けた気は戻らず、するすると体中の力が抜けていった。

「おい、ロイ！」

「ロイ、ロイ、しっかりしろっ」

側に残ってくれている少年たちがしきりに叫ぶようにして呼びかけてくる。

意識を落とすなという、焦っているような、怖がっているような

その呼びかけに申し訳なく思うが、これ以上意識を留め続けることは今の俺には難しかった。

（ごめん、少年たち。あとで意識が戻ったら謝るから……）

そうして俺は、心の中で必死になってくれている彼らに手を合わせながら、大きな力に引き離されるようにして意識を手放した。

（そういえば……こいつらがずっと呼んでるロイって、誰だ……？）

プロローグ（後書き）

誰だかわかったかもしれませんが、この少年少女三人組は少し後に再び登場します。

第一話（前書き）

※１２月１９日。ちょっと後半の一部を改変。

第一話

次に目を開けると俺はどこかのベッドに寝ていた。妙に硬いそれは、あきらかに普段使っているベッドではない。
どこだよ、ここ。なんだか被せられた毛布や頭を載せている枕も薬臭い気がする。
もしかして、病院、なのだろうか。

「オウ、目ェ覚めたか」

ぼんやりと見上げていたやけに高いコンクリ剥き出しの天井を背景に、ひょいっと覗き込んでくる年配の男性が視界に映った。白衣を着ていて、首には聴診器を掛けている。
多分、このおっさんは医者だ。じゃあやっぱり、ここはどこかの病院なのか。

「ここは？」
「医務室だよ」
「どこの？」
「どこって、てめぇ、士官学校のだよ」
「……え？」

俺の質問に怪訝そうな顔をしながらも医者は俺の目玉にライトを当てたり脈を図ったりし始める。
普通の病人に対する診察なのでされるがままになる。一通り終わったら、気分はどうだとか、頭は痛くないかとか問診され、少し考えてから問題はなさそうだと答える。

「ん、低酸素症の症状もだいぶ回復しているようだな」

「は…低酸素…？」
「お前なぁ、自分の能力で倒れるなんざ、身体張ったジョークかよ」
「……」
「ま、最初は能力者なんか皆そんなもんだ。気にせず制御訓練に励めばいいさ」

カルテに何やら書き込みつつ、ニヤニヤ笑いながら喋る医者に困惑気味の目を向けていると、ぽんぽんと大きな掌が頭のてっぺんに置かれた。
医者はポケットから出した錠剤を幾つか俺に渡し、それを飲み下すのを見届けると「安静にしていろよ」と言い置いて出ていった。
バタンとドアが閉まる音がして、一気に室内に静寂が満ちる。
窓から差し込む仄かな月明りだけの中、俺は深く息をついて目を閉じた。
ゆっくりと十数えて瞼を上げてみたが、広がる景色は変わらなかった。

「やっぱり、夢じゃない…」

どうしたものかと、とりあえず倒れる前の自分の中の記憶をたどる。
すると、なぜか二人分の記憶が浮かび上がってきた。
なんだ…これ。あり得ない出来事に驚いて、慌てて二つの記憶をなぞる。
その作業によって自分のことを思い出していき、ことの異常さにサァッと血の気が引いていくのを感じた。
俺の抱えた二人の人間の記憶。
一つは俺の記憶。ごく普通の日本人男性で、社会に出て数年のサラリーマンである俺自身の二十数年に渡る平々凡々な記憶だ。

そしてもう一つは、この身体の元の持ち主の記憶。１５歳になる少年で、今年遠い故郷からはるばる士官学校へ入学した……ロイという少年の記憶。

……敢えてもう一度言おうか、この身体の元の持ち主の名は、ロイ。名前はロイだけだが、あのロイ・マスタングだ。嘘でもなんでもなく、本当にロイ・マスタングだ。

漫画好きな者なら、一度は耳にしたことがあるかもしれない。日本で有名な漫画『鋼の錬金術師』の主要登場人物の一人といえば分かるだろうか。

出世街道驀進中のエリート軍人にして最凶の焔の錬金術を操る有能な錬金術師。

まさにその人が、この身体の元の持ち主。

驚くのはそれだけじゃなかった。

その彼が存在するのならば、それはおそらく今いるここは鋼の錬金術師の世界と皆思うだろう。

が、このロイの記憶から引き出した情報にはアメストリス、イシュヴァール、錬金術や国軍といった特有の用語が無かった。

代わりにあった情報は、グランドライン、マリンフォード、悪魔の実や海軍。

どう見ても別の人気漫画『ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ』の世界の情報と用語だ。

身体はロイ・マスタングだけれど、生きている世界はＯＮＥ　ＰＩＥＣＥって突っ込みどころが満載だよ。

一番突っ込みたいのは、異世界の赤の他人の身体を乗っ取ってしまった事実だけれどもさ。

（もう何が何やら、ほんと、どうしたらいいんだよ）

頭の中が理解しがたいことばかりでぐるぐるする。再びめまいがしてきたような気がして、目元に手を当てて深くため息を吐く。
どうしたらいいと悩むものの、とっくに理性は答えをはじき出してはいる。
これからどうするか、その答えは一つ。
身体の持ち主の代わりにロイとして生きていくというもの。
普通に考えて、俺はロイじゃないんです、実は日本人の一般市民なんです、なんて言っても信じてもらえると思うか？
十中八九頭がおかしくなったと思われて病院送りだろうな。それも檻付きの方のさ。誰でもそうだろうが、俺もそれだけは嫌だ。
檻付き病院を回避したいならば、ロイの記憶を元に以前のロイと同じように生活するしかない。海軍士官学校ロイ候補生として、軍に入るため日夜訓練と勉学に励むのだ。
平和ボケした日本人としては、海賊とか革命軍とか凶悪な奴らの蔓延る危険なこの世界で海兵さんをやるなんてまっぴらごめんだが、だからといって士官学校を止めるという選択肢はない。
何故かというと、ロイはなんと悪魔の実の能力者で士官学校に特別推薦入学している。その上、海兵志望者向けの奨学金なんてものまで取っちゃっている。
つまり何が言いたいかっていうと、退学すると貰った奨学金＋違約金みたいなものの返済義務を負うことになるってこと。
それに加えてこれだけの優遇を受けておいて、途中で大きな病気も怪我も何もないのに嫌になったから辞めますでは、世間体が物凄く悪くなること請け合い。途中放棄して辞めたが最後、莫大な借金背負って世間から白い目で見られて生きていくことになるわけだ。
それも絶対嫌だ、耐えきれないのが小心者の性。だから辞めたくても辞められない。
結局俺の選択肢はロイとして、未来の絶対正義を背負う海兵さんとして生きていくことしか残されていない。
それに、だ。悲しいかな、この先また元の世界に帰れる保証はな

い。帰れたとしてもそれはいつになるのかも予測できない。
本当に現実的に考えれば考えるほど、ここで生きていくためにロイをやることしか選べないのだ。
こういう時、元の世界で読んでいたような二次創作主人公はかなり楽観的で勇んで新たな世界の大海原へ飛び出していくものだったが、残念なことにチキンとして定評があった俺はそんな楽観的になれそうにない。
ロイ・マスタングがベースなんだからここでも強くなれる可能性はあるとは思う。
でも、海兵になったが最後、海賊の強い奴にドカンと弾き飛ばされるかプチッと潰されて終わるとか後ろ向きな未来予想図ばっかり頭の中に浮かぶんだ。
怖い目に合うくらいなら出世しなくてもいいや、しがない事務職を目指そう。兵站あたりのできる限り後方にいる部署を目指していこう。
どうにか強敵と殺し合わないで済むように生きたい、デンジャラスすぎる原作と関わり合いになりませんようにと本気で願っている。
夢が無い奴とか言うな。このチキンとか言うな。
……せめて現実的な小心者と言ってくれたら嬉しい。

第一話（後書き）

次回、同期の桜とご対面の予定。

第二話（前書き）

行き当たりばったりで書いてます。

第二話

ロイ・マスタングになってから、はや二日。
俺は医者のオッサンの根城たる医務室で過ごしている。
体調自体は翌日からそう悪くは無かったが、大事を取るってことでそうなった。
絶対安静だったので、ひたすらベッドの上でじっとしているのは結構辛かった。
まあ、面会謝絶でもあって見舞い客が来なかったから、ゆっくりロイについて記憶から情報を引き出して考えることができたのは悪くなかったがね。

とりあえず記憶を掘り出して、この世界のロイについて得た情報を話していこうか。

ロイは今年１５歳の士官学校一年生。
出身は西の海の大きな王国の首都がある島。
家族は父方の叔母のみ。両親は幼い頃に亡くなり、父の妹であった彼女が女手一つでロイを育ててくれたようだ。
それなりに叔母甥で仲良く暮らしていたロイが、規定の入学可能年齢よりも一年早く士官学校に入った理由は、どうも悪魔の実を食ったからしい。

そう、ロイは前にも言った通りこの歳にして悪魔の実の能力者だ。

喰った実は超人系エアエアの実。こいつによってロイは空気中に

ある物質ならばなんでも意のままに操れるという能力を得ている。
……役に立つかどうか微妙な能力だ。
それにエアエアなんて、ぱっと名前だけ聞いたら自然系で身体を空気に変えられる悪魔の実なんじゃと期待してしまうような名前だよな。
俺も実の名前を知ってすぐはチートを期待したから、その後で超人系という情報を思い出してがっかりしたよ。初期値がすでに最強なんてご都合主義はそうそうないもんなんだな。
そういえば二日前に倒れた原因は、この悪魔の実の能力を無意識に使ったためだと医者が言っていた。知らず知らずのうちに自分の周囲の酸素の濃度を急激に引き下げたせいで、きつめの低酸素症に陥ってしまったのだとか。
倒れる直前に中身が入れ替わった俺としては、それが本当の原因かどうか疑わしいと思う。急に俺が憑りついたから身体が拒絶反応でも起こしたんじゃないか、本当は。

話を戻す。
エアエアの実を食ったロイは地元の街に居づらくなった。幼少期のニコ・ロビンと同じく、周囲の人間から疎外されるようになったんだ。
悪魔の実の能力者は、ことごとく姿形が変えたり不可思議な現象を起こしたりと常軌を逸した力を示す。それらは常人に恐怖や嫌悪を感じさせるには十分すぎるものばかりで、ゆえに迫害を受けやすいんだよ。
食ったのは本当に不慮の事故としか言いようがないことだったが、ロイも能力者という恐ろしい、厭わしい存在として周囲に睨まれ始めた。

唯一の肉親である叔母は以前と変わらず可愛がってくれたのが不幸中の幸いだな。
だが、そんな優しい叔母にも次第に迫害が及び出してしまう。
そこに至ってとうとうロイは街を出る決意を固め、海軍の門を叩いた。海賊に対してあまり良い印象が無く、能力者でも安心していられる場所を考えた時、海軍が思い浮かんだらしい。
ロイは島にある駐屯所の本部大佐に海軍に入りたい旨を直訴し、大いに同情してくれた彼から士官学校と奨学金の推薦状を得た。
雑用での採用でなかったのは、海軍が行っている能力者の囲い込み制度のためみたいだ。
ロイの記憶によれば、海軍では上に行けば行くほど、事務や艦隊指揮に関する能力と共に本人の戦闘力の高さが求められる組織なのだとか。だから強くなりそうな人間には積極的に士官教育を叩きこんで上に上げて使いたいと考え、能力者の士官学校における優遇制度を用意したそうだ。入学試験免除とか、飛び級入学とか、金銭面の援助とか、いろいろと。
様々な特殊な力をはなから持っている能力者は、常人よりも強くなる可能性が極めて高い。いわば特大のダイヤモンドの原石だ。磨けば必ず光ること間違い無し。集めて磨かない手はないってことか。
おかげでロイも簡単な面接と心理テストを受けただけで、難なく入学を許可されて奨学金も下りた。

そしてこの夏、ロイは寂しがる叔母に見送られ、遠いマリンフォードの士官学校に入学した。

今は入学して約半年ほどらしい。
鬼のような体力作りの訓練や小難しい座学にも、教官や上級生からの強烈な可愛がりにもようやく慣れ始めた頃だ。
ロイは街と同じように避けられ嫌われるようなことがないのをとても喜び、毎日が楽しいと心底思って暮らしていたみたいだな。

ただ、人と関わることには馴れていなくて、いまだに同期たちと少し距離を持っているけれども。

俺がロイに入り込んだ日は、初めて出た航海実習の最終日だった。西の海ではあまり船や海と縁がない生活をしていたので、前々から楽しみにしていた実習だったそうだ。

艦上の業務や航海術の講義を受けつつ、ロイは広大で美しい自分がこれから生きていく場所を大いに満喫していた。

様々な明るい感情とほんの僅かな不安を胸に秘めながら。

そんな時だったのだ。

ようやく目の前が開けてきた彼を、俺が乗っ取ってしまったのは。

……うん、借金や世間の目が怖いから仕方ない、適当に楽な道選んでおこう、なんて軽く考えていた最初の俺、本当にロイに謝れ。

自分の思考が軽薄すぎて、夢や希望を抱えて真剣に生きようとしていたロイに申し訳なさすぎる。

もう、海軍を辞められない。いや、ロイを止められない。

これを知ってもなお自分の勝手に面倒事を避けて楽な方へ流れて生きるなんてできない。

やったら小心者だからでは済まない。本当の最低な糞野郎になってしまう。

怖いし嫌でたまらないけれど、腹を括らなくちゃいけない。

これからはロイとして生きていく。真剣に生きる。代わりに生き切ることでロイの未来を奪った罪滅ぼしをする。

それで許されるはずはないだろうが、そう思わなくちゃ罪悪感で胸が押しつぶされてしまいそうだ。

本当にロイ、乗り移っちゃってごめんなさい。
君のこの身体で、俺は生きるよ。
君の好きになった海で、大事に生き切らせてもらう。
だから、今はこれでわかってくれ。

……やっぱり危険な原作の出来事には首を突っ込まず生きようと思うけど、それだけは許してくれると嬉しいかな。

「よし、もう大丈夫みたいだな。帰っていいぞ！」
「痛ッ！？」

ニッカリ笑って思いっきり俺の背中を叩く医者のオッサン。力加減をしていなさそうな一撃に、一瞬息が詰まりかけた。
病み上がりになんてことするんだ、オッサン。また体調を崩したらどうするつもりだよ。

二日目の夕方にして、ようやく退院許可が出ましたよ。
症状ももう見られないし、後遺症もなさそう。明日から学業に戻りなってさ。
ようやくロイとしての生活が本格化するのかと思うと少し緊張するが、気を引き締めるにはちょうど良い。

「どうした、顔が強張ってんぞ」
「あ、いえ、何でもないです」

いかん、緊張が表情に出ていたようだ。オッサンが不思議そうに俺の顔を覗き込んでくる。
慌てて何でもなさそうに笑ってみたが、頬の肉が妙に硬い気がした。緊張し強張っただけじゃなくて、普段あまり笑ってなかったのかもしれない。

「そうかぁ？　ま、もうちょっとここで待ってろよ、お迎えが来るから」
「へ？」

前みたいにぽんぽん俺の頭を撫でるオッサンを、思わず見上げる。
は、お迎え？　誰か俺を迎えに来るのか？？
そんなことしてくれるような親しい人間はいないはずだけれどな……。

「今朝な、てめぇの同室の奴が退院させる時は呼んでくれ、心配だし迎えに行くからって、俺に言ってきたんだよ」
「同室の」
「そうだよ、さっき連絡したからもうすぐ来るから」

良い友達持ってんじゃないか、とオッサンはどこか懐かしそうにまぶしそうに目を細めている。自分の青春時代でも思い出して、微笑ましく思っているのだろうか。
そんなオッサンの様子を他所に、俺はぼんやり記憶を引っ掻き回す。

寮の同室の奴って誰だっけ？　どんな奴だっけ？？
んー、同室の奴は二人いるみたいだな。顔だけぼんやり浮かんできたわ。
変だな、こいつらどっちも日本にいた時どっかで見たような気が

する。
あ、あとこいつらの名前はなんだったかな。えっと、確か……
ふいに、コンコンと軽やかにドアを打つ音が病室に響き渡る。
同室の二人の名前を記憶から掬い上げたのは、ノックとほぼ同時だった。
ちょっと待て、この名前って、本当なのか。俺の同室二人って、まさか。

「先生、ドレークです。ロイを迎えに参りました」
「オウ、開いてるから入りな」
「失礼いたします！」

ドアの向こうから聞き覚えのある声がした。
これは、倒れる前に聞いた少年の声だ。
オッサンの許可とともに、カチャリと丸みを帯びたドアノブが回って、飴色をした重そうなドアが開く。

開け放たれたドア向こうから、現れた人間は三人。
スカイブルーのライン入りの白ジャージに、「ＭＡＲＩＮＥ」の文字の付いた同じ配色のキャップを被る彼らは、倒れた時に見たあの三人組だ。

あの時は逆光なんかでよく見えていなかった三人の顔が、今はしっかり見える。
まさかとは思いたかったが、三人ともさっき掘り出したロイの記憶と、俺の原作の記憶の中にかっちりぴったり当て嵌まる奴らだった。

「早かったじゃねぇか。お、スモーカーとヒナも一緒か」

うん、もう、なんて言っていいのかな。

赤旗と白猟と黒檻って、豪勢な同期の桜だこと！！

第二話（後書き）

原作ど真ん中な三人と同期でしたとさ。
スモーカーとヒナの二人とX・ドレークが同期なのはオリジナル設定です。

書いといてなんですが、ロイの中の人がコロコロ意見翻していて最低かもしれない。

第三話（前書き）

本作のロイの名前について。
色々とご意見いただき考えました結果、姓はなしで『ロイ』とだけにしておこうと思います。

第三話

【Ｓｉｄｅ：ロイ】

俺の容姿についてだが、ロイ・マスタングそのまんまだ。
黒髪に切れ長で一重の黒目、肌は白というよりは象牙色という、東洋系の特徴を押さえた風貌をしている。
目鼻立ちは整っているが、かなりの童顔でもある。童顔が多いと言われる日本人の目で見ても、絶対に１６歳よりも下では、と思うほどだ。
おまけに背が高くない。背の順で並んだら一番前、座学の教室でも最前列といった具合だ。この低身長が童顔に拍車を掛けて年齢詐称に貢献している気がする。

急に自分の容姿について言い出して、どうしたんだって？
別に自慢しているわけじゃないさ。まぁ昔よりは涼やかな見た目だし、ちょっと嬉しかったけど。
それは置いといてだな。
この容姿のどこが問題なのかだはな。

「じゃあコーヒー３つと、ロイはココアでいいな？」

周りからやたらと子供扱いされることなんだ。

メニューを示すドレークが、俺に訊いてくる。
お前って原作では出る度仏頂面ばっかりだったくせに、今の時点は爽やかな笑顔を浮かべていることが多いのな。

若々しいし、しっかりしすぎな顎にも、すでに綺麗に割れて六つの腹にも？の印が入っていないから、ちょっと前まで本当にこいつが？・ドレークなのかと疑ったものだ。
将来海軍を辞める時に、相当酷い目にでも遭って荒んだからああなったのだろうか？

「…コーヒーくらい飲めるが」
「おい、背伸びしてんじゃねぇぞ。せめてカフェ・オレくらいにしとけ」

俺の主張に困った顔をするドレークの横から、面倒くさそうにスモーカーが睨んでくる。
原作よりも１０歳以上若いくせして、こいつだけはあんまり漫画で見たのと変わらない。不機嫌そうな面に、ゴツイ図体、あと煙草。
今みたいな妙に気を回してくれるところもそのまんま。ズボンがアイス喰っちまったってぶつかってきた女の子に怒らずアイス代やるエピソードに繋がる、子供向けの優しさだな。
やっぱり俺を子供扱いしてんのか、この野郎。

「あのな、私はもう１６なんだ。子供扱いしないでくれ！」
「あ？」
「１６歳？」
「えっ、ロイ君って１６歳なの？　わたくしより年上なの？」

目を丸くして固まる二人。俺の横ではヒナが、驚愕よ、ヒナ驚愕！！とか騒いでいる。
あのクールビューティーなアラサー女将校様、学生時代はこんなにまさに女子高生な性格をしていたんだな。今も基本は優等生で冷

静だけれど、オフになるとこんな風にしている時もある。
オンオフを使い分けているのかもしれない。そういや扉絵のスピンオフでそんな一端が見えていたような、いなかったような。

「なんなら学生証で確認するか？」
「……」
「あら、本当にそうなのね…」
「……すまん」
「お前ら…私がいくつに見えていたんだ」
「12、3くらいかと思っていた」
「わたくしもそうだとばっかり」
「おれもだ」

ちょっとこの人たち酷くないですか？

本日は待ちに待った休日。
たまには遊ぶぞってことで、例の赤旗・白猟・黒檻、いや、将来にはそう呼ばれる予定の3人とマリンフォードの繁華街に繰り出してお茶している。

あの日から、もうそろそろ1年が経つ。
ロイになってぶっ倒れて、彼らに出会って助けてもらって、そして士官学校の苛烈な日々と人間関係にヒイヒイ言っていたら、いつの間にか1年が過ぎていた。
その濃厚な1年を過ごす内に、俺は3人とこんな風によく行動を共にするようになった。まあ、友達になった、と言っていいのかもしれない。
え、原作になるべく関わらないようにしようって言ってなかった

かって？
予定は未定なんだよ。世の中なんかどう転ぶかわからないことだらけなんだよ。

そもそもな、ドレークとスモーカーは俺の寮での同室だ。２人と関わらないでいるという選択ができなかったんだよ。やろうと思えばできたけれども、それができるほど俺は孤独を愛せる人間じゃない。
徐々に普通に日本での学生時代の友人と接していたようにしていたら、自然と親しくなっていた。
ヒナに関しても似たような経緯で仲良くなった。彼女も悪魔の実の能力者だったので、特別修練を一緒に受けていた。
修練を受けているのは俺たちの学年では俺とヒナだけで、もう友達になっとけと言わんばかりの環境だった。それに元から周りよりは若干ロイも彼女に心を開いていたし、難なくよく話せるようになっていった。

そうやっていって今でこそ普通の友人付き合いして気楽に話しているが、最初の頃は３人とも３様の変わった反応を見せてくれたものだ。
ドレークに座学でわからなかったところを訊ねてみたら、なんだか「クララが立った！」みたいな驚きと嬉しさが混ざり合って滲み出す表情を向けられた。
スモーカーの時は上級生に手荒く可愛がられそうだったのを助けてくれたので礼を言ったら、ぎょっとした顔をしてまじまじと見下された。
ヒナは２人と違って特に変わった態度も言動もなかったが、ふと気づけばもの凄く優しげで母性を感じさせるような眼差しで俺を見ていた。
３人の様子を見る度に、ロイってどれだけ人付き合いが苦手な奴

だったんだと愕然とさせられたよ。
それなりに近い位置にいた3人にここまでさせてしまうくらいだ。
怯えるハリネズミみたいに周りを遠ざけようとしてはいるが、周りの人間が心配してしまうような雰囲気を出していたのだろう。
周りから理不尽に迫害されていた過去のことを考えたら仕方ない部分もあるが、かなり面倒くさい奴だったんだな……。

まあ、3人と親しくなれたことで、最近はようやく他の同期たちとも何の変哲もない付き合いができるようになってきた。
いわゆるボッチを卒業したと実感した時、感動のあまりベッドの中でちょっと泣いたのは秘密だ。

しかしさ、本当にどうしてこうなったのかね。
原作で主人公の一味と根深い因縁を作っていたり、明らかに海軍の闇の部分を握ってそうだったりする奴らと仲良しになるなんて思ってもみなかった。
でも、悪くはないな。みんな基本的に良い奴らだ。友達になって後悔はないし、これからもそうであり続けられればいいと思う。

ただね、スモーカーと一緒にルフィたちと直接ガチでやり合うフラグとか、ドレークと一緒に海軍の暗部を掴んで堕ちた海軍将校になるフラグとか、結構危ないフラグが立った気がしないでもないけれどね！

【Ｓｉｄｅ：ドレーク】

ずいぶん肩の力が抜けた、とでも言えばいいのだろうか。
拗ねたように尖らせた口でコーヒーを啜るロイを見て思う。

西の海から来たこの友人は士官学校に入学してからしばらく、人と上手く関われないでいた。悪魔の実の能力者であることで、故郷の島では酷い迫害を受けていたせいらしい。
そのため常に周りの人間と距離を取ってしまい、時に相手の反応に怯えるような素振りを見せることもあった。
同室であった俺やスモーカーにさえその調子だ。そうとう酷い目に遭ってきたのだろう。

ロイが好きで人と距離を取っているわけではないことは、しばらく寝食を共にしていてわかった。寮の部屋で俺に話しかけようか迷っている素振りを見せたり、雑談している奴らの輪に入りたそうにしていたりすることが時折あったのだ。
だから本人に歩み寄る意思があるならば、と空いた距離を縮めようとした。自己満足かもしれないが、一人寂しそうにしているのをどうにかしてやりたかった。そうする度にやはり怖いと思われたのか逃げられていたが。
そういえば俺がロイを虐めているのではと勘違いしたヒナが、俺とスモーカーに怒鳴り込んできたのも確かこの時だ。能力者同士であり二人でいることが多かった彼女もロイを気にかけていたので、もしそうならばと我慢ならず行動したらしい。

逃げていたロイの方も、俺たちの行動に何か感じるものがあったようだ。
半年ほど過ぎた頃から、徐々に自分からこちらへ歩み寄ろうとし始めた。
同じ頃に航海実習の時に倒れた彼を助けたことが転機だったのかもしれない。初めてロイの方から出た言葉は、そのことに関する礼だった。
それからゆっくりと、恐る恐るといったふうにロイは俺たちと会話を交わすようになり、こうして休日に遊びに出るくらいに親しく

なった。
最近では他の同期たちともこれもまたゆっくりと溶け込んでいっている。以前のように寂しそうな顔をすることもなくなった。
良い傾向だと思う。これから同じ旗の下で正義のために戦うんだ。同期として、戦友として仲良くありたいものだ。

「そういえば、それは何なのかしら？」
「これか？」
「ええ、珍しくロイ君が武具用品店なんて行くんだもの。何を取り寄せたのかしら」

ケーキを突いていたヒナが、思い出したかのようにロイの足元にある紙袋を指して言った。
ロイが持ち上げてみせると、興味津々といった体で彼女は頷く。
薄茶の袋には、さきほどロイの希望で寄った武具用品店のロゴが描かれている。確かご注文の品、とか店員が言ってロイに渡していた木箱が入っているはずだ。
士官学校生でも、学校の貸し出し品ではなくて自前の武器を用意する者は多い。特に刀や銃器関係をメインに扱う者、または珍しい武器を使う者ほどその傾向にあり、ちょくちょく武具用品店に通っているものだ。
だがロイはそうした武器を使ってはいなかったと思う。訓練だって、剣術や槍術、銃火器の訓練ではなく、六式とナイフを用いた接近戦用格闘術の訓練に重点を置いているようだった。
専用のギミックでも仕込んだナイフでも買ったのだろうか？

「開けてみるか」
「良いの？」

ちょっと考えた後、ロイは袋から木箱を取り出してヒナに渡した。
受け取ったヒナは、そっと箱の蓋を外す。
カコ、と木が擦れ合う小さな音を立てて開いた蓋の下には、白い手袋が一揃い納まっていた。
武具用品店で手袋？　どういうことだろうか。ヒナもスモーカーも、俺と同じように妙な顔をしている。
触ってもいいと言うので、手に取って検分してみた。手触りは滑らかで織りのきめは非常に細かい。シルクかと思ったが、それにしては生地に厚みがある。
しかしそれだけだった。表も裏も良く見てみたが、これと言った細工は見当たらない。
仕立ての良い白手袋。そうとしか言いようがない。これが武器とは到底思えなかった。

「ロイ、これは？」

コーヒーを開けたロイと目が合う。
切れ長の目が愉快そうに細められ、薄い唇の端だけがキュ、と上がった。
今まで見せたことがない不敵な笑みを浮かべて、ロイは俺の疑問に答えた。

「発火布の手袋……私の専用武器だよ」

第三話（後書き）

若い３人のイメージ。
ドレークはお人よしの優等生。
スモーカーは雨の日に子犬がいたら拾う不良。
ヒナはいかにも女子高生な委員長。
完全にねつ造です。

次回はようやく焔の錬金術発動の予定です。

第四話（前書き）

焔の錬金術、発射します。

第四話

【Ｓｉｄｅ：ロイ】

窓から差し込む爽やかな朝日が差し込む教室には、今俺と能力修練の担当教官だけしかいない。

「よく発火布なんて手に入ったねェ～高かったでしょ」

「ええ、本当に能力者への助成金がなかったら私には買えない額でしたよ」

先日届いたばかりの発火布の手袋を摘み上げていろんな角度から眺める教官の中将を前に苦笑を零す。

発火布の手袋は、本当に高かった。この世界に発火布が存在すると知り、ロイならやっぱりこれだよなと気軽に入手を試みて本当に驚かされたよ。

どうも発火布は海楼石並みに希少な繊維らしく、布の状態でも目を見張るような価格で取引されていたんだ。

その辺をまったく知らなかったもんだから、見積書が来た時に提示された金額のゼロが予想より３桁も多くて１０回以上読み返してしまったよ。

結局学生課に泣き付いて助成金をもぎ取った上に１０年ローン組んでまでして買った。

ニコニコとした笑顔にサングラスを掛けた文字通りに上げるほどの長身の中将は、やっぱりねェ～と納得したように溜息を吐いた。

「わっしにも事前に相談してくれたら、都合付けてあげたのにィ～……」

「いえ、そこまでしていただくのは気が引けますよ」

時々ビックリするような発言を投下してくる人だよな。
都合付けるってなんだよ。武器開発局とかに口を利いて、裏ルートから調達させてあげたのにってことか。
それって学生に対して過剰な援助っていうか、他人にバレたら問題にならないのかすごく不安になるよ！

「良いんだよォ～？　遠慮なんかしなくてもさァ」
「お気持ちだけでうれしいです、ボルサリーノ中将」

あんたに借りとか作りたくないんです、ってのも本音なんですよ。

……もう皆わかったかな。
俺の担当教官、黄猿なんだ。あ、今はまだ中将だからボルサリーノ中将だけどね。

悪魔の実の能力者の士官候補生には、基本的に能力制御のための特別修練が課され、担当教官として能力者の海兵が個別に当てられている。一対一で無意識に能力を出してしまわないようにする制御のやり方とか、どういう風に持っている能力を使っていくかについて相談に乗ってもらったりとかするんだ。
その制度によって俺はボルサリーノ中将に師事することになったんだよ。

初対面の時、内心でなんでだと絶叫しまくってしまった。
だって黄猿だよ？　なんというか、得体が知れなくて恐ろしい人だと思うのは俺だけかな。

黄猿大将ボルサリーノ。
シャボンディ諸島でドレークたち億超え海賊４人と麦わら一味相手に無双して、戦争編でも海賊たちを青雉と赤犬と見劣りしないくらいにボコッてたから強いことこの上ない。実力のある人だってことは確かだ。
けれども、のらりくらりしていて意図が読みにくく、しっかりと自分の正義を掲げる青雉と赤犬に比べて、その正義がよくわからない。とりあえず軍の命令に忠実だってことはわかるが、そこから先、自分の裁量での正義が不透明な気がする。なんなんだ、「どっちつかずの正義」って。
彼のことは俺の読んでいた辺りまでではわからなくて、それ以降に詳しいことがはっきりする事柄なのかもしれない。
でもそのはっきりする辺りを知らない俺とっては、底なし沼みたいに恐ろしい人なんだよ。関わったらどうなるのかが読めなさすぎて怖い。
赤犬が来て今すぐ徹底的な正義に精神を追い詰められるよりは良かったかもしれないが。

とりあえず今の時点では、能力制御なんかの手解きを受けつつ、中将がどういう人なのか探ることにしている。少しでも情報が得られれば、距離を取るかどうかも考えられるしな……。
畜生、なんで青雉が来なかったんだ。ある程度過去話とか考えていることとか明らかになっている彼なら、こんなに頭使って対応しなくてもよかったのにさ。
世の中ってうまくいかないのな……。

「ま～必要なものも揃ったようだし、今日は試し撃ちしてみようかァ？」
「はい！」

俺に手袋を返しながら、中将が外を指さす。窓の外には、だだっ広いグラウンド、この士官学校の訓練場が広がっている。
発火布の手袋が手に入り次第、考えていた技の一つを試すと予定していたのだ。
そう、焔の錬金術の再現技をね。

さて、ここで一つ俺の能力について少しその詳細を語ってみようと思う。
俺が食った悪魔の実、エアエアの実。
超人系に属する実で、その力は大ざっぱに言って空気中の物質を意のままに操ることができる。
ただし、何でもかんでも、どんなふうにでも、ではない。
訓練していく中でわかったことだけれども、俺の能力には制約がいくつか存在したんだ。

まず、能力で干渉できる物質に関する制約。
俺は地表面上の大気を構成する成分の物質しか操れない。
どうも空気＝大気という定義らしい。酸素や水素は問題なく弄れたのだけれど、煙草の煙の成分や撒かれた毒ガスの成分には全く干渉できなかった。
よって俺が使える物は、大気の基本成分である窒素、酸素、二酸化炭素、アルゴン、水素、一酸化炭素、ネオン、ヘリウム、メタン、クリプトン、オゾン、アンモニア、水蒸気、一酸化二窒素の１４種のみ。
そして実戦でこうした気体を使用するなら、ある程度の攻撃力が望めて、かつ敵に気づかれにくい無色無臭の物の方が望ましい。
となると実質使えるのは、酸素、水素、水蒸気、二酸化炭素、一酸化炭素くらいになってくる。案外少ないもんだな……。

次に操作方法にも制約がある。
まず俺にできる物質の操作とは、具体的に言うと指定した場所とその範囲の内での指定した物質の濃度調整と分解・合成である。
本当にそれ以外の操作はできない。できるのは、場所と範囲と物質を指定してその中で変化を起こすことだけだ。
合成・分解も操れる物質の制約との絡みか、大気に存在しない物ができてしまう操作はできない。たとえば水蒸気（Ｈ２Ｏ）を分解して水素と酸素は作れるが、二酸化炭素（ＣＯ２）を分解して酸素と炭素は作れないって具合だ。
もう１つは、同時に操れる物質は２つまでというもの。これについての理由は仕様ですとしか言いようがない。
なぜかはわからないが、３つ以上の物質を操ろうとすると３つめの操作は無効化されてしまうんだよね。
修練を続ければその制限も上限が上がるかもしれないが、それも可能かよくわからない。

うん、お前の能力って最強すぎるから、ある程度縛り付けとくよって感じだな。
そんなに完全なチートが嫌いなのか、ここの神様は。

でも、これだけ縛りがあっても恐ろしいほどの殺傷力を秘めた能力なんだよね。
例えば、酸素や二酸化炭素、一酸化炭素を使った制圧や殲滅。
酸素、二酸化炭素、一酸化炭素は、正常な空気の中では人体に害はない物質だ。だが、その濃度が変わるだけで猛毒に変化する。俺の能力を使えばこれらの濃度を意図的に弄り、低酸素症や酸素中毒、二酸化炭素中毒、一酸化炭素中毒といった中毒症状を対象に引き起こさせ昏倒させることができるんだ。
しかもやろうと思えば濃度調整の匙加減一つで人を殺せてしまう。

こうした中毒は、呼吸器や脳など生命活動に深い関わりを持つ器官へ大ダメージを与えるからだ。
特に一酸化炭素中毒なんかは手遅れになるまで自覚症状がほとんどでないっていう凶悪な仕様。
聞いたことはないかな。毎年冬になるとストーブの不完全燃焼とかで発生した一酸化炭素による死亡事故とか結構起きているんだよ。周囲に一酸化炭素が増えていることに気づかないまま吸い続けて、そのまま意識を刈り取られて逃げられず死んでしまうんだってさ。
これを応用すれば、こっそり敵の周りの一酸化炭素の濃度を上げていき、静かに戦闘も起こさず殲滅してしまうなんて芸当も可能だろうな。
……暗殺向きかもしれない。

じっくりゆっくりした攻撃ではなく、対象にすぐ大きなダメージを与えたいならば、それこそ今日試そうとしている焔の錬金術だ。
焔の錬金術の仕組みは、対象物との間の酸素濃度を調節し、宙を舞う可燃性の塵（塵が殆どない場所では水蒸気から引っぺがした水素）を導火線に発火布で出した火花を伝わせて爆発炎上させるというもの。
俺の能力なら、錬成陣がなくとも点火源さえ確保すれば再現可能だ。
対象物の周辺の空気に大量の水素を混ぜ込んで爆発力を上げるなんてこともできる。
さらにその辺の酸素と水素が材料だから玉切れはなく連射が可能。得られる攻撃力は十分すぎるほどだろう。
白兵戦に有効なのはもちろんだが、戦場に出たらもの凄い戦略兵器になれてしまうぞ、これ。前線に俺が一人投入されるだけで、大砲や火炎放射器十数門分くらいの大火力が唐突に出現するんだ。敵に及ぼす被害もさることながら、戦意をかなり挫けるだろうし、戦局をひっくり返せる可能性すら出てくる。

本当に最強にして最凶の錬金術だって言われるだけはあるよな。
まあ、雨の日は導火線が湿気っていてうまく確保できず発動がほぼ不能になるが、それは置いておいて。

やっぱりこの焔の錬金術が俺の主力武器になるだろう。
俺がロイだから、という先入観もあることにはある。だが、それだけではなくて戦闘に非常に有効だと思える決め手があるんだ。
それは、大きな攻撃力、派手な効果、発動の容易さ。どれをとってもわかりやすくていい。わかりやすいということは、他者へのアピールになるんだよ。
俺が焔の錬金術を駆使して戦っていたとする。対峙している敵は、よっぽどのことがない限り俺が炎使いか何かだと勘違いするだろう。そして、焔の錬金術での攻撃に意識を向けて対策を練ってくれればしめたもの、能力を使って他の物質を操って敵を落とすことができる。
つまり卑怯かもしれないが、隠し玉として酸素・二酸化炭素・一酸化炭素での絞め落としを使うんだ。派手な焔の錬金術ならば隠れ蓑に最適だしさ。
そういう方向で中将との話も進んでいる。
こうしたいんですがどうでしょうって相談した時に、君えげつないねって言われたけど気にしないよ。

さあ、そうこうしている間に訓練場に到着。
せっかくだし、はじめては気持ちよくドカンと一発かましてみようか！

【Ｓｉｄｅ：スモーカー】

訓練場のあたりがなんだか騒がしい。
わらわらとどっから集まったのか知らねえが、結構な人だかりができているのが目に入る。
何があったってんだ、気になりつつも脇を通り過ぎようとした時、ふいに人だかりの中から聞こえてきた単語に足が止まる。

「ロイ……」
「……あの2年生の…」
「…能力使うって……」
「……危ないらしいぞ」

ロイが能力を使う？
それで危ないらしい？
確かにあいつの能力は扱いが難しく、一歩間違うと味方や自分にまで被害を及ぼす難儀なもんだが。
使う、ということは何かしらの技を発動させるってことだろうか。効果の出る範囲のでかい技でも使うから、下手によると巻き添えを食うってことか？
あの変に人を心配させやがるチビのことと聞いてしまったら、妙に気になってしまった。
仕方なしに様子を見に人だかりの側に寄ると、見慣れたオレンジ頭とピンク頭が揃っているのを先に見つけてしまった。

「おい、お前ら何してんだ」
「あ、スモーカーか」
「貴方も野次馬に来たの？」

無理矢理人混みを掻き分けてドレークとヒナの下に近づく。野次馬という言葉が少々気に障るが、まあ今の状態を言い表すには的確な表現なので黙っておくことにする。
二人は人だかりの前付近にいた。

「ロイ君が能力を使った技を試すんですって」

ヒナの指差す先に目を向ける。
訓練場の縁のあたりに、ロイとやけにひょろっとしていて馬鹿でかい将校、多分ロイの修練の担当教官だろう、が立っているのが見えた。
今は何か話し合っているようだ。

「どんな技を試すんだろうな？　訓練場にいる生徒は全員追い出されてしまったんだ」
「見るなら距離を取って見るようにまで言われたのよ」
「……なんだそりゃ」
「すごく危ないんだと。巻き込まれたら死ぬかもしれないらしい」

興味津々といった体で訓練場の中を覗き込んでいるドレークの言葉に眉を顰める。
危ないの程度がおかしくないか。なんだよ、巻き込まれたら死ぬかもしれないって。
ロイの方を見るが、別段普段と変わらないように思う。
いったい何が危ないってんだろうか。
話し終わったのか、教官の将校がロイの側から離れて後ろに下がった。どうやら始まるらしい。
教官が十分に離れたのを確認したのか、ロイが前に向き直る。
そうして腕を前方へと突出すようにした。遠目にだが、出された手が白い物で包まれているように見えた。

あれは、こないだの休みにあいつが買ってた手袋か？　なんとかって特殊な布で作ったとか言ってた……。

ロイの手の先をよく見ようと目を凝らそうとした瞬間、近くで大砲をぶっ放したより酷い、鼓膜を蹂躙するような爆音が響き渡った。

同時に視界に強烈な光が叩きつけられ、思わず光から逃れようとして目を瞑る。

悲鳴やらなんやら周りから漏れる声が聞こえた気がしたが、耳が痛くてそれが本当に聞こえたものか分からなかった。

冬場に似合わない焼けるような爆風が止んだ後、ようやく目を開ける。

土煙が濛々と立ち上り、土くれと焼け焦げた嫌な臭いが漂っている。すこぶる悪い視界が広がる中、何が起きたのか確認しようと必死で見まわす。

ロイの奴はどうした。

何が起きたんだ。

何をあいつは起こしたんだ！

ようやく薄れ始めた土煙の先に、ロイの姿を認める。

ペタリと後ろの方に尻餅をついた形で座り込み、遠目にも蒼いとわかる顔でさっきと同じ方向を凝視していた。

後ろにいた教官の方に目をやると、こちらも同じ方に顔を向けていた。

「あ……」

少し耳鳴りが治まってきた耳に、息を飲むドレークの声が聞こえた。

ドレークもロイの視線の先を見ている。何があるのだろうか。そ

の視線を辿っていく。
そして、言葉を失ってしまう。

「なんだ…これ」

数秒前まで広がっていた訓練場の風景が、大きく変わっていた。
どこまでも均等に均されていたグラウンドのど真ん中に、突如巨大なクレーターが出現していた。

第四話（後書き）

ロイは力加減を間違えたもよう。

第五話（前書き）

本年はこれにて筆納め。

第五話

■海軍本部【Ｓｉｄｅ：クザン】
海軍本部内で、妙な噂が流れている。

曰わく、今朝マリンフォードを騒然とさせた爆音は士官学校の訓練場で起きた大爆発のものだ。

曰わく、グランドを抉り巨大なクレーターを刻んだそれを起こしたのは一人の士官候補生のようだ。

曰わく、その士官候補生はボルサリーノ中将が面倒を見ている悪魔の実の能力者らしい。

……全部本当なら、めちゃくちゃ大事じゃないの。
そういえば、ボルサリーノ、昼ごろにコング元帥に呼ばれてたな。
士官学校の校長と教官数名が珍しく本部にいるのも見たし。
噂はガセじゃないってことか？
あいつの担当してた学生ね……西の海から来たあの子のことだろうな。
ロイ君、だっけ。
去年の夏くらいにチラッと見かけたことがある。ボルサリーノの後ろに縮こまって隠れてた小さな男の子だ。
あの子の能力ってそんなに凶悪な攻撃力を持ってたのかな？
ボルサリーノの奴、捕縛と制圧が主体になるんじゃないかって言ってたんだけれど、使い方次第で化けちまったってこと、か。

……気にかかるね。
海賊王が処刑されてこの方、海賊は増加の一途を辿っている。
力のある奴ない奴、有象無象が一斉に海賊王の最期の言葉と時代の熱に浮かされて、力任せに欲望のままに海を荒らしているんだ。取り締まりを強化しているんだけれども、こちらを叩けばあちらで暴れ、あちらを抑えればそちらが蹂躙され、とイタチごっこの様相を呈してやがる。
人手不足は慢性化しつつあり、借りれるもんなら猫の手でも借りてぇのは否定できない海軍の実情だ。
最近は革命軍だとかいう連中まで現れ、不穏な動きを見せているしな。こっちに対応する戦力も欲しがられてきている。

こうした状況下で、圧倒的で広範囲に及ぶ攻撃力、敵をいとも簡単に無力化できる力を持つ者が現れたら？
ましてやそれが海上でも、陸上でも、集団戦でも、白兵戦でも、あらゆる場所や対象に有効な能力であるならば？

断言できる。
こんな状況にこんな能力者、今すぐにでも欲しいと思うやつは、この海軍には山ほどいると。
特にあいつや、あいつに近い連中は必ずロイ君に目を付ける。
そして主張するだろう。即実戦に投入すべし……絶対正義の実現のために、ってな。
主張を通した後は、無理矢理士官学校を繰り上げ卒業させて、准尉任官。そのまま前線や激戦区に連れて行って、ひたすら悪を焼き尽くさせるってとこだろう。
ただひたすら、ロイ君は悪を滅ぼすためだけに力を揮わせる。そのためだけの人間兵器となることを強いられる状況に置かれ続ける。
そんな中で、彼はいつまで自分を保てるかな？
殺せと言われれば、どんな相手でも、どんな場所でも殺さなけれ

ばならない。自分の意思など無視されて、正義の名のもとに命をひたすら刈り取るばかりの毎日で、１６の少年は心を死なせてしまうんじゃないだろうか。

うん、ゾッとしねえ未来だな。

海賊を始めとする悪を打ち倒すために力を揮うって点は否定しないが、だからと言って１人の少年を兵器として扱うってのがいただけねぇ。

確かに黙って軍の望む通りに敵を薙ぎ払う海兵はさぞ使い勝手がいいだろう。

そんな海兵を手に入れるために、士官候補生を１人精神的に殺しちまうことがはたして正しいことなのだろうか。

それは味方を殺すような真似じゃあ、ないのか。

まだ、そうと決まったわけではない。

けれども、そうなる可能性は高いだろう。

良いか悪いかは別として、気分が良くない結果になるとわかっているから、できれば止めたいと思う。

俺が口を挟んで少しでも回避する可能性があるのならば、とボルサリーノの執務室まで来たんだよ。

直接ロイ君を指導してるあいつを説得して味方に付け、反対すればどうにかなるはずだ。

ま、あののらりくらりとした男を説得できる自信はあんまりないんだけれどね……。

「ボルサリーノ、いる？」

勝手知ったる同期の部屋だ。ノックをして、声を掛けつつドアノブを押す。

開いたドアの向こうには、部屋の主と、いてほしくなかったフード野郎がソファに向かい合って座っていた。
こちらを向いたサカズキと一瞬目が合ってしまう。
思わず、眉間に皺が寄ってしまう。サカズキの方は、不機嫌そうに目を逸らした。
やっぱりこいつ、来てやがったのか。俺は出遅れちまったのか。

「あれェ～クザンじゃないのォ。もしかして用件は君もロイ君のこと～？」
「……君もって、そこのサカズキの用件もそうだったわけ？」
「うん、そうだよォ。ちょ～ッと待っててねェ」

もう話は終わるから座ってなよ、と変わらぬゆったりと間延びした口調で勧めるボルサリーノに従い、不本意ながら彼の向かい、サカズキの横のソファに腰掛ける。
話が終わる、やっぱり出遅れちまったのな、畜生。
やり場のない気持ちが、舌打ちという形で小さく出てしまう。
フードの奥から、少し苛立った視線が放たれたが、気になどしてやるもんか。

「サカズキ、そういうわけだからァ～了見してくれないかい？」
「……」

話の続きをボルサリーノが始める。
不満なのかなんなのか、サカズキは黙りこくったまんまだ。
どういうこと？　サカズキの不満に思うことでも起きたのかね？
いつまでたっても続く言葉を出さない2人。室内の空気が、重苦しく強張っているのに今頃気づかされる。
手元に用意されていた湯呑に、ボルサリーノが口を付けた。ゆっくりと中身を飲み干して机に静かに戻した時、その表情を見てぎょ

っとする。
いつもの貼り付けたような笑顔が、なかった。
「……ロイ君の繰り上げ卒業は、わっしが認めない。元帥から同意するって旨の言質も取ってあるから諦めなァ」
「……そうけ、わかったわ」
「じゃあ話すことはもうないねェ～」
「そうだな、邪魔したのう」

サカズキが隣から立って出ていくまで、俺は動けなかった。
とりあえずロイ君の繰り上げ卒業は回避されたのはわかったけれども、俺が来る前にそれがなされちまったってのが驚きだった。
これってボルサリーノが、ロイ君を自主的に庇ったってことになるのか？
一介の士官候補生にここまでこいつがやるなんて、今まであったっけな。多分、なかったと思うんだが。

「どういうこと？」
「ん～何が？」
「お前にしちゃ珍しいことしたなあと思ってね」
「そうかな？　ま～、ロイ君は良い子だしねェ。わっしも、気に入ってるからさァ」

俺の茶を手ずから注いでくれている同期は、肩ごしにそんなことを言う。
気に入ってるか、ますます珍しいね。

「良い子なんだ？」
「そうだよォ、聡くて臆病で、真っ直ぐな子なんだァ。一生懸命修練にも励んでくれるしねェ」

「へぇ、本当に気に入ってるのね」
「もちろんさァ～彼の臆病なところが特にねェ」
「臆病なのって、そりゃまたどうしてさ」
「自分の力にまで怯えるから、きっと驕ることはない。強すぎる自分に箍を掛けて適切な行動を心掛けてくれるし、周囲への注意を行き届かせることができるからさァ」
「指揮官向きってこと？」
「そうそう、繰り上げ卒業に反対したのもねェ～ちゃぁんと士官のなんたるかを学ばせた方が良いと思ったからねェ」

ただの人間兵器にするには惜しい子だよ、と言いつつ差し出された湯呑を受け取る。
一口だけ口を付けて向かい合うボルサリーノを見れば、さっきと違って笑ってやがった。
作ってない笑顔だな、そんな珍しいことしちゃうくらいロイ君のこと可愛がってるってわけね。

「……何でそこまで肩入れしてあげるわけ？」
「気になるかぁ～い？」

自分用に新しい茶を淹れ始めた彼に、一番気になる疑問をぶつけてみる。
やっぱり、これはロイ君を気に入っているってだけでは説明しきれていないと思う。
気に入ったと言うのは本当かもしれないが、それ以外の計算や意図もあるのではないか、そう勘ぐってしまう。
気になる、と頷いてみせると、ボルサリーノはにっこり笑って答えた。

「内緒だよォ」

■海軍士官学校訓練場【Ｓｉｄｅ：ロイ】

「日が暮れる……」

鮮やかすぎるほどの夕陽が放つ金朱と夜が連れてきた濃藍が入り混じる美しい空を見上げる。

冬って日暮れが早いんだよね。

さっき１６時を告げる鐘が鳴ったところなのに、もう太陽が水平線の向こうにさよならしてらー。

午前中に焔の錬金術もどきを試した。

広い訓練場で、周りから人を遠ざけて、グラウンドの中心に目印の石を置いて、きっちり被害が他人に及ばないよう注意してな。

結果は大成功。

狙った場所に酸素と水素を望む通りに展開できたし、発火布の火花もちゃんとそこまで行き着いて爆発してくれた。

でもね、力加減っていうか、思いっきりやってみたら、どうも酸素と水素を多めに撒いちゃったようでね。

うん……大成功させ過ぎた。失敗じゃないよ。思っていたより、うまく大爆発が起こってくれちゃってさ。

グラウンドのど真ん中から直径３００メートル程度、抉り取ってクレーター作っちゃっただけなんだよ。

本当にそれだけなんだよって、言い訳になってないですか……？

『壊したものは自分で直さねェとなァ～、頑張んなさいよォ』

試し撃ちの後でボルサリーノ中将に野次馬してた生徒たちと一緒に訓練場の整地を命じられた。すっごくいい笑顔で俺の頭撫でながら、子供に言い聞かせるみたいにな。

しかも何か言う前にピカッと光になってどっか行っちゃったんだ。

おかげで俺一人で校舎から慌てて出てきた教官たちに事の次第を説明したり、整地を一緒にしろって命じられたいつもの3人を含む野次馬どもに謝り倒したりしなきゃならなかった。

あの人俺の担当教官なんだから、学校の教官たちへの説明くらいは付き合ってくれてもいいんじゃないか？

「オイ、なに黄昏てやがる。とっとと手ぇ動かせ！」

思いっきりイラついていることが丸わかりな怒声が、隣でトンボ掛けしているスモーカーから飛んでくる。

こいつに怒鳴られるの今日何回目だろ？　１０回から先数えてないや。

きっと終わった後にも寮で試し撃ちの詳細をドレークと一緒に根掘り葉掘り聴取されるな。それからそのまま説教されるんだろう……危ないことするなら十分気を付けてやれとか、人に迷惑をかけるんじゃないとか。

あいつらが俺の友人兼保護者やってるって自他ともに認識される節があるんだよ。一応俺、あいつらより精神年齢だけは１０歳以上も年上なんで、お兄ちゃん二人と弟みたいな扱いが少々不満だ。

「ド畜生ー！　何でこうなったァァー！！」
「ロイィィっ！　聞いてンのかコラァッ！！」

ちょっとした怒りと悲しみを込めて叫んだ俺の後頭部にスモーカーの拳骨が決まったのは、約2秒後だった。

たんこぶできたよ。超痛い。

第五話（後書き）

知らないところでロイは赤犬にロックオンされた模様です。

三大将の関係、海軍の内情、いろいろ捏造してます。

人間２人集まると派閥ができるってことです。

赤犬好きな方ごめんなさい。

では皆様良いお年を～。

第六話（前書き）

あけましておめでとうございます。
本年もよろしくお願いします。

今回はロイ、現実を知るの巻前編。

第六話

■南の海某海域、ボルサリーノ中将旗艦【Ｓｉｄｅ：ロイ】

こっちにやってきてから、もう2年近いか。
俺ことロイは無事に2度目の進級試験に合格し、ようやく2回目の夏季休暇を迎えることに成功できたよ。やったね！

今回の試験も正直しんどかった。座学や訓練や演習は年を追うごとに厳しくなるもんだから、付いていくのが大変で大変で……。
元々の俺は文系でロイはどうも理系が得意だったから、どうにかこうにか座学は両方の知識と頭脳を総動員し、中の上と中の中でフラフラしながら無難にクリア。
たださ、問題はさ。実技だよ。艦上作業や銃器の扱いはともかく、白兵戦の訓練は死にそうだったんだよね。
学年一小柄な俺ｖｓ．理想的な軍人体型のドレークとかいう対戦はザラなんだよ？
最初は本気で勝てる気がしませんでした。だって、見上げるほどのマッチョがものすごいスピードで攻撃してくるんだよ？　もう避けるので精一杯。2分も掛からずホーイと投げ飛ばされて地面に這わされるとか、毎日の話だったわ。

これには能力者といえども、あまりにもダメすぎると危機感を抱かされた。
それで六式とナイフによる接近戦格闘術の訓練を付けてもらうことにしたんだ。最低でも接近された時に自分の身は自分で守れる程度の力は付けておくのを目指してさ。
必死で取り組んだ結果、六式は剃、月歩、紙絵を無事に習得できた。

何で攻撃技を習得しなかったって？　それはさ、俺には焔の錬金術や空気中毒技があるからだな。指銃や嵐脚より攻撃力も発動スピードも上の攻撃できるんだしそっちに比重を置いているんだよ。そもそも俺の真価は能力を使った攻撃だしな。

鉄塊は訓練を始めて早々に習得を諦めた。直接攻撃を受け止めるって、めちゃくちゃ怖くてさ。怖い思いするくらいなら当たらないようにした方が断然マシだと思って、剃とかの方に重点を置いたってわけ。

ナイフはほぼ急所を狙う一撃必殺系の技を磨いている。刺して相手を動けなくし、追ってこないようにして逃げるためだ。合理的だろう？

逃げてばっかりとかいうなよ。

ちゃんと敵に攻撃をして、近づかれたら尻尾巻いて逃げてまた遠距離から攻撃するからな。如何なる状況でも戦略的撤退を成功させるための技術を磨いてるってだけなんだよ。

ようやく最近では、こうした訓練が功を奏して何とか白兵戦の模擬戦も無難にこなせるようになった。学年の半分くらいには素手で勝てるようになり、試験にも無事合格できる程度にはモノになってきてる感じだな。

ま、同室のお二人さんにはいまだに勝ててないが。ドレーク相手に引き分けに持ち込んだのがせいぜいで、いまだスモーカーには5分以内に沈められている。あの煙野郎、強すぎだ。

……別に悔しくなんかない。俺が能力を使えば、まだ能力者じゃないあいつら相手になら有利に戦えるからさ！

さて、近況はここまで。
現在の状況について話していこうか。
今俺は、ボルサリーノ中将と一緒に軍艦に載って南の海を航海中だ。
夏季休暇初日に寮でゴロゴロしていたら、急に中将が部屋に来たんだよ。
それでさ、「ちょっと職場体験しないかい？」ってニッコニコ笑いながら言うの。
あんまりにもあんまりに唐突な登場とお誘いに唖然としてしまったよ。
え、職場体験？　職場体験って何それ、そんな中学校の社会科の行事みたいなもんあったっけ？？
驚きすぎてはいとも何とも言えないまま、ハッと気が付けば部屋から担ぎ出されていた。
うん、文字通り担ぎ出されていた。俵担ぎにされて士官学校から運び出されたよ。一緒に部屋で寛いでいたドレークとスモーカーにも、廊下や訓練場にいた教官や生徒たちにもドナドナされる子牛を見るような目で凝視されながらな。
そのまま港に直行して艦に放り込まれて、ようやく少し落ち着いて甲板に出たらマリンフォードから結構離れていた。
それだけでも予想外の出来事なのに、帰港できるのは2週間後だってさ。
ちょっと待って。この夏は遠く西の海の叔母さんに会いに行こうかと計画していた。士官学校の夏季休暇は大体1ヶ月で、故郷の島まで大体片道1週間で、往復なら2週間。完全に帰省は無理だよね、これ。
ロイが出ていって一人で暮らしている彼女に顔を見せてあげるのも大事な孝行だってのに！

「そいつァ残念だったねェ～また次の休暇で帰るといいよォ」
「はい」
「便箋あげるから、叔母さんには手紙書いてあげなァ～。何にもしないより喜ぶんじゃねェかァ？」
「お心遣い、ありがとうございます」

海軍オリジナルの青い便箋を渡してくれる中将に向けた俺の笑顔が僅かに引き攣っていたのは、この際仕方のないことだと思う。
このオッサン、出会ってからこの方、俺を振り回し過ぎだろう。そういうのって、ガープ中将とか青雉辺りの役割じゃないのか。
でも悪い人ではないんだよな。
学生の俺に対して、振り回す代わりに懇切丁寧に指導してこまめに相談にも乗ってくれる。フリーダムに見えて案外面倒見がいいんだ。加えて仕事をきちんとこなすってことも今回艦上の業務を側で見学していて良くわかった。その姿勢はワンマンでもなく、丸投げして責任だけ取る方式でもない。部下の人たちともちゃんと言葉を交わしながらことを進めている。自分がやるべきことはやり、任せるべきところは任せ、ちゃんと監督して部下の手に余れば手を差し出す。艦内の気が張りつめ過ぎた時は、適度にとぼけたところを見せたりしてガス抜きしている。
あれ、ボルサリーノ中将って、理想の上司じゃないか。強くて面倒が見良くて、ユーモアもありちゃんと仕事もしてくれるって、一緒に仕事がやりやすい良い上司だろう。
学校の中ではなかなか知ることのできない中将の姿を見て、その人物評価を上方修正しておいた。ちょっとだけだけどな。いまだに読めない行動や思考が少し不気味だし、ふいに振り回してくるところが困りものだから信用しきれないからなぁ。

「ボルサリーノ中将、失礼いたします」

航海中の俺の学習日程について中将と話し合っていたところに艦長である大佐が入室してきたのは、出航2日目、カームベルトを越えてしばらくした午後だった。
正義の文字が入った白コートをスーツの上に羽織って『ＭＡＲＩＮＥ』のキャップを被る、如何にもＯＮＥ　ＰＩＥＣＥの海軍将校といった雰囲気を持つ大佐が、中将にピシリとした敬礼を向ける。

「報告します。先ほど見張りの者が、不審な船影を発見いたしました。海賊旗は上がっていませんが、船の形状などから海賊であると予想されます」

海賊船発見！
うわ、俺、海賊船と遭遇するなんて初めてのことかもしれない。ビリッと緊張が背筋を駆け上って、心臓が少しだけ早くなる。
海兵になったらそうそう珍しい事態でもないんだろう。大佐も中将も落ち着いている。馴れないでビクついているのは俺だけだな。
どうなるんだろうかと中将の方を見る。目があったら、ニコッと小さく笑いかけられた。

「おー…ちょうどいいねェ。とりあえず職務質問のための停船命令出しといてくれないかい？」
「ハッ、直ちに」
「わっしもロイ君連れて甲板に上がるからよろしくねェ～」

見学に組み込むつもりなのね。海兵の代表的職務を知る絶好の機会だもんな。見ないって選択肢はないか。
停船命令から追撃、それから捕縛かその場で討伐って感じかな。どう艦内が動くか、どういう対処がなされるか、それを実地で知ることができるなんて滅多にないぞ。艦上勤務と事務処理の科目です

ごく役立つはずだ。俺って運が良いかもしれないな。

大佐が退室した後、中将の後ろにくっついて戦闘要員の海兵が揃った甲板に上る。

揃いの白い海兵服に身を包んだ一般兵と正義コートをはためかせる将校たちが、一斉に中将へ敬礼をする中を足早に歩く。ちょっと張りつめた空気と俺に向けられた好奇の視線が肌を刺激しピリピリするような気がした。

船縁の近くには大佐と中将の副官の大尉がいた。

「不審船はどこだい？」

「1時の方角、約５００メートル先であります」

中将と大佐の会話を聞きつつ、大尉が貸してくれた双眼鏡を覗き込む。

えっと、1時の方角……あ、見つけた。一見民間船くらいの大きさと船装している船がぽつんと浮かんでいた。報告通り海賊旗は上がっていない。だが自衛の武装にしては大砲が多く装備されているように見える。うん、怪しい船だ。たぶん海賊船なんだろうな。

そうそう、こっちに来て知ったんだが、海賊はいつでも海賊旗を掲げているものではないそうだ。

原作のルフィみたいに常日頃堂々とあげている奴はもの凄く少ない。普段は隠して海軍の目を逃れたり、狙う船や街に海賊と悟らせず近づいたりするために隠す奴の方が圧倒的多数だ。その代わりに名を売りたい時、誇りを掛けて戦う時は堂々と掲げる。普段は隠してここぞという時に掲げるのが海賊旗、ジョリーロジャーらしい。

この船もそうなんだろうな……って、なんかあの船、急に遠ざかろうとしてないか。

「報告します。不審船は停船命令を無視。逃走する体勢にあります」

あ、やっぱり逃げるのな。海賊船確定だわ。

停船命令の手旗信号を送っていた通信兵の報告に、じゃあこれから追跡かと次の艦内の動きを予想しながら双眼鏡から目を離す。

大尉にお礼を言って借りていたそれを返し、中将を見上げる。双眼鏡を覗き込んだまま指示を出していた。

「あ～仕方ないねェ～追跡するよォ。ここからじゃ砲撃も当たんねェもんなァ～」

「ハッ。総員配置に付け、不審船追跡を開始する！」

「「「Ａｙｅ，Ｓｉｒ！」」」

中将の意を受けた大佐の命令に、搭乗員全員がバタバタと各々の所定の位置に付く。１分も掛からないうちに、軍艦はその航行スピードを上げ始めた。

さすが中将座乗艦ってところか。戦闘だけじゃなくて航海に関しても本当の精鋭揃いなんだろう。

多分民間船を改造したであろう海賊船と海軍本部の精鋭軍艦じゃ勝負は見えているというものだ。

幾らもしないうちに距離は詰まり、こっちの大砲の射程距離に十分入るところまで迫った。目をよくよく凝らせば、なんとか海賊船の上で動く人影が見えるほど近い。

あっちの甲板の上では慌てたように武器を持った人間が走り回り、大砲がこっちに向けられつつある。逃げ切るのを諦めたみたいだな。返り討ちにするつもりなのか、勝てる気なんかなくてやけっぱちなのかはわからないけれども。

さぁ、次は砲撃開始か。直接海兵が乗り込まなくても、砲撃だけで沈むだろうな。あの程度の船なら、本部の大砲と砲手の手に掛かれば簡単に海の藻屑だろう。

あ、今2度目の停船命令と武装解除命令を無視したな。しかも大砲撃ってきた。こっちに届いてないけれど。
海賊の皆さん、御愁傷様。撃沈確定だ。

「おーい、ロイ君」

間延びした、いつも通りのボルサリーノ中将の呼びかけに、我に返って海賊船から視線を外す。慌てて横を見れば、中将が俺の方を覗き込んでいた。

「ここらで一つ、能力使用の実地訓練やろうかァ？」

ニコニコといつも通り笑って中将が言う。
大きな手のそれ相応に長い指が、ひょいっと海賊船の方を指し示す。

「あの船をォ～沈めてくれねェかい」

第六話（後書き）

この南の海での出来事関連は長くなるんで、あと1、2話引きずる予定。

次の更新は来週の研究報告の準備があるのでちょっと間が空きます。

第七話（前書き）

研究報告終わったー！

ロイ、現実を知る編の続きです。

第七話

■南の海某海域、ボルサリーノ中将旗艦【Ｓｉｄｅ：ロイ】

「あの船をォ～沈めてくれねェかい」

その口調はまるで、そこの書類取ってよ、と頼むみたいに軽かった。

何の気負いもなくあまりにも自然な様に思わず、「Ａｙｅ，Ｓｉｒ．」といつものように答えてしまいそうになる。

「あー…いつものあれでいいよォ、ここからなら十分届くよねェ～」

いつものあれとは、焔の錬金術の再現技のことだ。

冬に訓練場を吹き飛ばしたあれならば、あの程度の海賊船を沈めるだけの威力なら簡単に出せる。距離も問題ないだろう。十分届かせる自信がある。

あれから制御の訓練に力を入れてきたから、それなりに威力も効果範囲も射程距離も思うように操れるようになったんだ。

海賊船を沈めてしまうなんて、俺には造作もないことだ。

……能力上では、ね。

「沈める、んですか？」

喉から思ったように声が上がってこない。

無理に出したら、無様に掠れて萎びた言葉しか出なかった。

俺が沈める。

俺があの人間が乗っている船を沈める？

砲撃ではなく、俺自身が能力で手を下す？
腹の奥に、重く気味の悪いものが落ちてきたような感覚を覚えた。
事が俺の中で現実味を帯びた。そういうことなんだろうか。砲撃で撃沈かな、なんてさっきまで軽く思っていたのが嘘みたいだ。

「止める、ではな」
「止めるんじゃァなくてェ～海賊共ごと沈めて欲しいなァ」

煩い胸の内のざわめきを抑えて俺が絞り出した言葉を遮るように、中将が言う。
いつの間にか手にしていた書類を一枚、俺の方へ差し出す。
これは、報告書？

「あの不審船、いや、海賊船についてこっちで目視確認したことと、近隣支部から提供された情報をまとめた物だよォ」

少し読め、との言葉を受けて食い入るように文面を目で追う。
あの船は海賊船で間違いなかった。乗っているのは、懸賞金８２０万ベリーの賞金首『野狐』トレイシー率いる海賊団。
船長のトレイシーが野狐と呼ばれる通り、狡猾で残忍な性質の海賊団としてこの辺りで忌み嫌われ怖れられている悪党らしい。
今日も民間船のフリをして侵入した近隣の島で略奪行為を行い、島民を多数死傷。討伐に出た支部の部隊を返り討ちにして逃走した。その途中で俺たちの軍艦と行き合ってしまった、ってところみたいだな。

「あれに乗ってるのはァ、今まで散々民間人を蹂躙してきたクズ共。捕まえたとこで縛り首さァ～それならロイ君の練習台になってもらった方が有益じゃねェかァ？」

確かにこれだけ悪行を積んでいるのなら、中将が言う通り海賊団丸ごと処刑台送りは確実だろう。ここで討伐してしまおうが、捕縛して地元の司法組織に引き渡そうが、海賊共の死期が僅かに変わる程度の違いしかない。

だから海賊ごと船を沈めて死体だけ回収して支部に引き渡すでも構いはしない。その方法が軍艦による砲撃ではなく俺の攻撃でも、相手を確実に始末できるなら構わない。

「砲手に命令だよォ、只今よりロイ候補生が海賊船に一撃を入れるまで一切の砲撃を禁じる」

中将の命令に一般兵がほんの僅かにどよめく。

しかし士官や下士官たちは、変わらず各々の配置について平然としていた。もしかして、こうなることを事前に知ってたのか。

「さァ、始めようかァ」

「え……」

「やりたくねェのかい？」

「いえ、その」

腹に落ちた気味の悪いものが、身体の中でぐるぐる暴れている。気持ちが悪くて堪らない。口を開けば何か出てきてしまいそうだ。

そう感じるがゆえに、はからずとも口ごもってしまう。

いつも通りの笑みを浮かべたままの中将が、自分でも蒼いだろうとわかる俺の顔を覗き込んでくる。

「砲手たちに砲撃させるのは良くてェ、自分が手ェ下すのは嫌なのかい？」

心臓が止まるかと思った。

血が冷たくなってそこに流れ込んでいく錯覚を覚える。

まさに、わかりたくないけれど、俺の本音はそうだった。

軍艦からの砲撃で海賊船を沈めると聞いても、その準備を見ても、あまり思うところがなかった。当たれば乗っている人間は死ぬか大怪我をする、人死にが出るものだ、とは理解していた。だがそれでも、映画のリアルな戦闘シーンを見ているような感覚しかなかった。

撃ったところを見ても、海賊船が沈むのを見てもそのままだったろうな。

いくら近くで見聞きしても、俺が直接引き金を引いたわけではない。ゆえにどこか現実味を感じない、というか、当事者意識が湧かないままだろうから。

だから、お前自身が引き金を引け。命じられて初めてそんな自分に気が付かされた。

自分があの船を沈める。そう思って改めて海賊船を、そこに蠢く人間を見て愕然とした。

俺は軽くあの船を沈めることができる。人を殺してしまえる。そのための方法だって考えてきたし、実践するための技術も磨いてきた。

けれども、実際にあそこに乗っている人間を船ごと焼き殺すことは……できるだろうが、恐ろしくてやりたくないと、思った。

自分の手で人を殺したくない。自分以外の誰かがやるなら、もしくは考えるだけならそれは別に構いはしない。でも自分の手を染めるは、怖いし厭わしいしやりたくない。

そんな自分勝手な気持ちばかりが、胸を埋め尽くしている。

ああ、腹に落ちたと思った気持ち悪いものの正体がわかったよ。

俺の中にある殺人に対する忌避感とか醜い身勝手さとか、そうい

ったもの。それと、そんなもの抱えている自分自身に対する反吐が出るような嫌悪感。
それらがごちゃ混ぜになって俺の腹に落ちてきたってわけなんだな。

「どっちが撃っても結果は同じだよォ。早くて玉が無駄にならねェから、ロイ君の方が都合が良いけれどねェ」
「都合が、良い」
「そ～……君の能力は高性能で便利な大砲みたいなもんさァ」

中将の言葉がさらに突き刺さる。
つまり俺は人間兵器、便利な道具と思われているってことか。
常人が持ちえない攻撃力を持っている時点で、鋼錬のロイ・マスタングの如く今後軍内で俺は兵器扱いされるだろうなとは予想していた。
頭では分かっている。所属している組織が軍隊である上、兵器扱いは避けられない。それだけの力を示してしまった以上、それを覚悟していなければならないことも。
それでも、人間として見られず物として扱われることへの苦痛が無視できない。

「早くしねェとォ～海賊共の弾が当たっちまうよォ？」

まごつく俺に中将が催促してくる。
気が付けば、海賊船にさっきよりも近づいていた。砲弾も当たってはいなかったけれど、わりと近くに着弾してその衝撃が軍艦を揺らしている。
俺が撃たなければ、軍艦に当たるのは時間の問題だろう。
甲板を見渡せば、そこにいる人間全員が俺と中将のやり取りを見

ていた。
向けられた視線が、早くしてくれと催促しているみたいに思える。
俺が一撃入れなければ、この人たちは海賊船に攻撃できないんだ。早く討伐を終えたい、何をもたついているんだと皆思っているだろう。
高々一発撃てば、後は砲撃なりなんなりできる。万一沈まなくてもいいからとにかく撃て、そういう雰囲気が漂い始めるような気がした。
一発。そうだ、一発でいい。もし沈まなくても、まだ学生だし言い訳は立つ。
わざとマストに当ててそれなりに被害を与えるだけでもいいんじゃないか？
周りの声に出さない催促を感じても、自分に色々な言い訳を自分にしても、撃ちたくない気持ちは湧き上がる一方だ。

逃げ出してしまいたい。
できませんと叫びたい。
でも、逃げられはしない。
畜生、どうすればいいんだ……！

「っわ！？」

唐突に、足元が激しく揺れた。
その場に踏ん張りきれず、揺れと一緒にバランスを崩して滑り、倒れ込んでしまう。
大きな水飛沫が軍艦の真横から飛び上がって甲板めがけ降り注ごうとするのが視界の端に映る。

咄嗟に倒れ込んだまま身体を俯せにして、身体で手袋をした右手を庇う。
背中に海水の冷たさと濡れた不快感、能力者ゆえに海水を被って感じる倦怠感があるが、なんとか右手は濡れなかった。
濡れた床に右手が触れないよう注意しながら起き上り、いまだ大きく揺れる甲板を見て息が詰まる。
ついさっきの衝撃は、どうやら海賊の大砲が軍艦を掠めて着弾したみたいだ。
俺が今いる艦首よりも右手の船縁が一部欠け崩れている。そこから揺れるたびに高く波立つ海水が飛び込んできていた。

次は当たる。確実に当たる。

知らず後退りかけて、後ろ足に何かが引っ掛かった。
……嫌な予感はしていた。
でも、恐る恐る後ろを覗き込む。
そこには、真っ白な海兵服に身を包んだ三等兵が倒れていた。大きな揺れのせいか、掠った砲撃の余波でか、吹っ飛んで床に倒れたのだろう。
同じように倒れた海兵の姿を、砲弾の掠った付近に幾つも見つけた。単にこけただけの俺と違い、怪我をしているみたいだった。皆痛そうに顔を歪めているのが見て取れ、低い呻き声が耳に届く。

その瞬間、頭がぼうっとなった。
息が、動悸が、おかしなリズムを刻み出す。
頭の中で、色んなものが駆け巡る。
気持ち悪い、怖い、苦しい、泣きたい。
中将が何か話しかけてくるけれど、耳に膜が張ったみたいに聞き取りづらい。

答えられないまま、視線を後ろの倒れた三等兵にもう一度向ける。
同い年くらいの彼の額には、真っ赤な血が一筋。
流れる先にある目が、薄く開いた。
目が、合う。

今の攻撃で、こうなった。
俺がもたついたから、砲弾が掠って、軍艦も欠けて。
こいつも他の海兵も怪我をして――

右腕が勝手に上がる。
伸ばした先には、近くなった海賊船。
そこには大砲を装填している人間、何か叫んでいる人間、走り回っている人間が見える。
もう何も考えられなかった。
向けた右手の親指と人差し指を重ねる。

鮮やかな朱の焔が、躍る。

第七話（後書き）

書き始めたら前回予告したより少し長くなりそう。

次回はロイを見ていた海兵さんたち視点を予定。

中将の意図がわかるのは次回になりそうです…予告を無視して申し訳ありません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4772z/

焔の海兵さん奮戦記

2012年1月12日02時07分発行